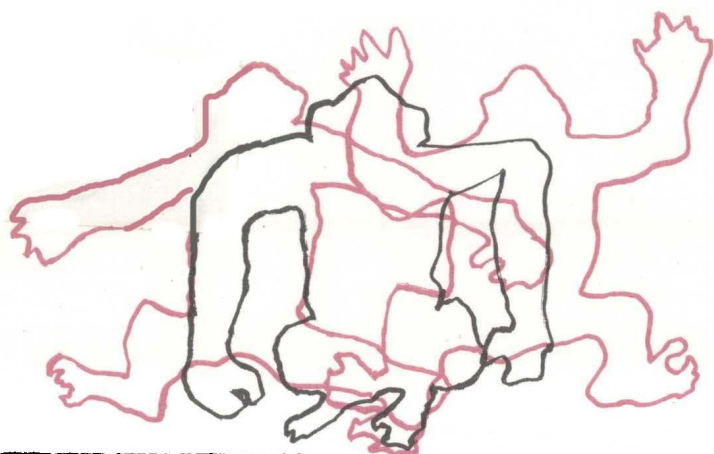


灰谷健次郎

ゴンちゃん

長新太絵





江苏工业学院图书馆
藏书章

長瀬太絵

ちゃん

灰谷健次郎

おはなしメリーゴランブド

ゴンちゃん

1997年4月15日 第一刷発行

1998年6月10日 第四刷発行

作者——灰谷健次郎

画家——長新太

装幀者——杉浦範茂

編集者——成澤栄里子

発行者——水谷晃二

発行所——株式会社文溪堂

東京都文京区大塚3-16-12(〒112)

電話 03-5976-1515(営業)

岐阜県羽島市江吉良町2801(〒501-62)

電話 058-398-1121(編集)

振替 001407-167627

印刷所——株式会社図書印刷同朋舎

製本所——株式会社若林製本工場

©1997 Kenjio Hatan, Shinta Cho Printed in Japan

ISBN 4-89423-178-6 NDC913 176p 21cm

落し点本はおとりかえいたします。定価はカバーに表示しております。

ゴンちゃん

四年三組に、とてもかわった転入生てんにゆうせいが入ってきた。

どれくらい、かわっているかって？

ま、話をせかささないで。

はじめ担任たんにんの与田先生よだだけ教室へ入ってきていった。

「新しい友だちを、みんなに紹介しょうかいする。えー、ぼくからお願ねがいするが、

とくべつなかよくしてあげてほしい」

キンちゃんがたずねた。

「男？ 女？」

「えっ？」

と与田先生は首をかしげた。

「男なのかナ……、女なのかな？……」

「どういうことオ？ 先生、しっかりして」

おてんばのハナマルハナコが大声で、抗議こうぎをするようにいった。

そりやそうだろう。とくべつなかよくしてやってほしいだなんて頼たのん

でおいで、新しく入ってくる子が、男の子か女の子か知らないなんて、

いいかげんもよいとこだ。

先生として完全かんぜんに職務怠慢しよくむたいまんである。

与田先生は年齢よだ四十二歳ねんれい。えっ、というほど若く見える。十九歳の娘むすめ

さんがいるなんてとても信じられない。

気も若い。

子どもの前でいばらない。

「ヨタローくん、あのねエ……」

とか、

「きのうのおもしろい話をしてあげようか。ヨタローちゃん」

とか、友だちのように話しかけても、

「はい、はい」

とか、

「はい、はい」

とか、

「さよかいなア」

とか返事をする。

そんな与田先生よだに対して、もう少し、はじめをつけてほしい、という親も少しはいるが、たいていの親は、ぜったい、与田先生支持しじ派だ。

「オレんとこの母ちゃん、父ちゃんと別れて、与田先生と結婚けっこんしたいわア、なんて、むちゃくちゃいうとんで」

キンちゃんとなかのよいゴロちゃんはいっている。

ことわっておくが、この物語に登場する子のおおかたは本名ほんみょうでない。

ハナマルハナコも、あだなである。

そんなことにこだわらないで、話をすすめていくことにしよう。

「アメリカの前の大統領だいとうりょうはん、頭がボケていく病氣やそうやけど、先生も、それとちやうか。そんなに、はよボケたら、アキナちゃんがかわいそうやで」

トツくんがいった。

アキナちゃんは、与田先生よだの娘むすめさんの名前だ。

ときどき与田先生の家へ遊びにいくので、たいていの子は、アキナちゃんを知っているのである。

アキナちゃんは顔はきれいが、いうことは、すごい。

「あんたら、うちの俊平しゅんぺいくんを受け持ってもらって不幸ふこうやなア」

自分の親を、俊平^{しゅんぺい}くん、なんていう娘^{むすめ}がいるだろうか。

「なんでエ？」

キンちゃんがきいた。

「うちみたいな不良^{ふりよう}になったらどうすんのん」

だれかが、うまいとこ突^ついた。

「不良が、不良っていうのん？」

「顔見たらわかるでしょう」

とアキナちゃんはいった。

「顔、きれいやん」

キンちゃんが返した。

「そう。このごろの不良^{ふりよう}は、こんな顔してるの。知らない？」

「……？」

「ほなら、うち、不良ふりようになりたいワ」

その場にいたトン子がいった。

一度、キンちゃんアアキナちゃんのお母さん、つまり、与田よだ先生の奥おくさんに、

「アキナちゃん、なんで自分のお父さんのことを、俊平しゅんぺいくんなんていうのん。先生、怒おこらへんの？」

と、たずねたことがある。

「わたしが、ずっと俊平しゅんぺいくんと呼よんでいたから、赤ちゃんのときから、わたしのマネをして、それがそのままになってるのでしょう」

「ふーん」

奥おくさんもさっぱりしている。

なんだかよくわからないけど、やっぱりヨタローちゃんはいいなア、

と子どもたちは思うのであった。

ともかくアキナちゃんは、与田先生よだの家へ遊びにきた子どもたちを、からかいまくる。

たぶん、不良ふりようというのはウソだろうけど、ありきたりの優等生ゆうとうせいやブリツ子でないことだけはたしかだ。

話が横道よこみちにそれたが、転人生が男か女かわからないって、いったい、どういうことだろう。

ハナマルハナコでなくったって、だれでも、そう思う。

「ほな、まア……」

与田先生は困こまったように、目を、白黒しろくろさせた。なにが、ほな、まア……だ。ごまかすつもりかもしれない。

「……ともかく新しい友だちを、みなに会わせることにする」

与田先生は、戸をあけ、廊下に顔を突き出して、

「どうぞ」

といった。

転入生は廊下で待っていたんだろうか。

みなは目をこらした。

大きな大人が、のっそり教室へ入ってきた。

なにか抱いている。

「わっ」

と、何人かの子どもが叫んだ。

男の人が抱いているのは、毛むくじらの怪物？

教室の右側のイスにすわっていた子だけ、その顔が見えた。

わっ、と声をあげたのは、そのためだ。



「サルや」

「チンパンジーとちがうのん」

教室中がどよめいた。

男の人が、その顔を、みんなに見えるように、自分の方から向きを変えた。

チンパンジーだった。緊張きんちょうしているのだろう。男の人に、しっかり抱だきついている。目が、あどけなくて、かわいいのだった。

「ゴンちゃんといいます。きょうから、みんなの友だちにしてあげてください」

与田先生よだはいった。

男の人がいるからか、ものの言い方が少し改あらたまった感じである。

「ゴンちゃんを抱だいている人は、亀山かめやまさんといっています。動物園の飼育技しいくぎ

師^し、生物^{せいぶつ}学会^{がっかい}の会員^{かい}で、動物^{どうぶつ}のことにたいへんくわしい専門^{せんもん}家^かです」

その亀山^{かめやま}さんは、

「みんな、よろしゅうな」

と、あいさつをした。明るくて大きな声だった。気さくな人らしい。

「さつき、だれかがゴンちゃんのことを、サルや、といったが、亀山さんはゴンちゃんを自分の子と同じように、『あの子』とか『この子』と呼んでかわいがっているの、ゴンちゃんのことを、そう呼ばれるのが、いちばんかなしいのやで。そこを氣^きつけて」

ようやく、日ごろの与田^{よだ}先生の、ものの言い方^{もど}に戻^{もど}った。

「ゴンちゃんは生まれてすぐ、お母さんを病氣^{びやうき}でなくした。亀山^{かめやま}さんと

奥^{おく}さんは毎日毎日、ゴンちゃんに、お乳^{ちち}を飲^のませ、オシメをとりかえ、

病氣^{びやうき}をしないよう夜中に起きて神^{いの}さまに祈^{いの}った」

「人間と同じように育てたわけ？」

ハナマルハナコがたずねた。

「そう。いや、人間の赤ちゃん以上というべきかもしれない。やむをえない事情とはいえ、ゴンちゃんは、そんなふう^{じじょう}に育てられたから、自分を人間だと思っている」

そら、そうや、とだれかがいった。

「ここからの説明^{せつめい}は、亀山^{かめやま}さん自身^{じしん}にしていたく方がいいと思うので、交替^{こうたい}しよう」

そういつて与田^{よだ}先生は、話を亀山さんにゆずった。

「それじゃ、そこからは、ぼくが話そうか……」

亀山さんは、みなに笑顔^{えがお}を向けた。

亀山さんは大きな大人^{おとな}だけれど、亀山さんの笑顔や、その目を見てい